

# 新人保育士の就職後におけるリアリティショック状態の推移

○松浦美晴<sup>1</sup>・上地玲子<sup>1</sup>・井皆川順<sup>2</sup>・岡本響子<sup>3</sup>・岩永誠<sup>4</sup>  
 ( <sup>1</sup>山陽学園大学・<sup>2</sup>浦和大学・<sup>3</sup>天理医療大学・<sup>4</sup>広島大学)

保育士の早期離職の要因にリアリティショック (RS), すなわち「予期しなかった苦痛や不快感を伴う現実」(Kramer, 1974)がある。本研究ではこれを予期と実際との認知的不整合がストレスラーとなってストレスが生じる過程(岡本・岩永, 2015)ととらえる。新人保育士個人の持つ先行要因をもとに就職後のRSを予測できれば, RSを防ぐための介入策を考えることができる。本研究の目的は, 新人保育士のRSの予測変数となる個人要因を見出すことである。

## 方法

**RSの指標** 保育士RS尺度(松浦・上地・皆川・岡本・岩永, 2018): 新人保育士の予期と実際とのギャップの認知を測定する4因子27項目。保育士RS反応尺度(松浦・上地・皆川・岡本・岩永, 未発表): 新人保育士がギャップの認知により引き起こすストレス反応を測定する2因子10項目。**先行要因の指標** 自尊感情: ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版(桜井, 2000)から6項目。特性的自己効力感: 成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)から5項目。ソーシャルスキル: Kiss-18(菊池, 1988)から6項目。ストレスへのコーピング: GCQ特性(佐々木・山崎, 2002)各因子から3項目計12項目。周囲からのサポート: MSPSS日本語版(岩佐・権藤・増井・稲垣・河合・大塚・小川・高山・藺牟田・鈴木, 2007)各因子から3項目計9項目。保育者効力感: 三木・桜井(1998)から5項目。

**調査対象と調査時期** 保育施設に2016年4月から勤務する保育士と2017年4月から勤務する保育士, 保育士養成校を卒業後2017年4月から勤務する保育士を調査対象とした。先行要因については, 養成校卒業前の1月から就職後5月上旬までの間に調査を行った。目的変数となるRSとRS反応については, 就職後3ヶ月, 6ヶ月, 9ヶ月後に調査を行った。郵送及びWebで回答させた。**分析** 保育士RS, RS反応の就職後の得点変化により新人保育士を3クラスターに分類し, 就職後のRSの推移の異なるクラスター間で, 先行要因がどのように異なったかを検討した。

## 結果

**回答者の分類** 全尺度に欠損値のない回答者27名に対し, RSとRS反応の推移でクラスター分析(Ward法)を行い, 3クラスターに分類した。RS, RS反応を従属変数とする時期要因とクラスター要因の2要因混合分散分析で, 時期要因主効果は有意ではなく, クラスター要因主効果はRSとRS反応下位尺度全て有意( $F_s(2,24)=8.16-53.99, p<.01$ )であった。2要因交互作用は, RS「職場の問題」が有意( $F(4,48)=5.24, p<.01$ ), RS「心理的孤立」( $F(4,48)=2.27, p<.1$ ), RS反応「内的反応」( $F(4,48)=2.38, p<.1$ )が有意傾向であった。C1(5名; 低RSクラスター)は, RS, RS反応共に全体的に低く, C2(14名; 高RSクラスター)は, RS, RS反応共に全体的に高く, 「内的反応」「職場の問題」が3カ月後に最も高くその後減少, C3(8名; RS職場環境帰属クラスター)は, 「業務負担の重さ」「力量不足」のみが低く他が高く「職場の問題」「心理的孤立」は時期とともに増加していた。**先行要因のクラスター間比較** 先行要因を従属変数としクラスターを要因とする分散分析の結果, 特性的自己効力感( $F(2,24)=3.99, p<.05$ )保育者効力感( $F(2,24)=5.48, p<.05$ )が有意, ソーシャルスキル( $F(2,24)=2.80, p<.10$ )が有意傾向であった。多重比較の結果, 特性的自己効力感はC1>C2, C3>C2(有意傾向)であった。保育者効力感はC1>C2, C3>C2であった。ソーシャルスキルはC1>C2, C1>C3(有意傾向)であった。

## 考察

結果から, 自己効力感, 保育士効力感, ソーシャルスキルの低さがRSやRS反応の高さにつながる可能性が示唆され, 自己効力感, 保育士効力感が高くともソーシャルスキルが低ければ, 就職後時間とともに職場の人間関係, 心理的孤立のRSも高くなることが示唆される。就職前に, 自己効力感, 保育士効力感, ソーシャルスキルを高めしておくことが必要と考えられる。

本研究は, 科学研究補助金挑戦的萌芽研究(研究課題/領域番号15K13152), 公益財団法人ウエスコ学術振興財団研究活動費助成事業, 山陽学園大学・短期大学学内研究補助金の助成を受けた。